

目次

ごあいさつ	3
神戸大学 国際人間科学部同窓会紫陽会 会長 蔭山 慎吾 神戸大学 国際人間科学部 学部長 梅屋 潔	
【特集】私たちの国際人間科学部（研究紹介/GSP体験記）	5
○研究紹介「ジェンダー研究と移民研究の出会いとところ」 グローバル文化学科長 青山 薫	
○GSP体験記「英国留学記」 「多様な出会いの中で」 グローバル文化学科4回生 三島 尚也 発達コミュニティ学科3回生 岩原 大悟	
【トピックス】	
○第18回ホームカミングデイ	7
○第14回紫陽会賞	
○教育実習事前実習	9
【会員の広場】	
○支部だより	10
・大阪支部 津田 毅 ・姫路支部 稲葉 一子 ・東京支部 菅河真紀子	
○ICT教育が導く未来 氣賀 諭志 ○神戸大学☆夢ラボ 榛原久仁子 ○対話を通じて学校を創る 柴垣 正治	
【2024年度 評議員会報告・資料】	14
・2023年度事業報告 ・2023年度決算報告 ・2024年度事業計画案 ・2024年度予算案 ・2024年度 評議員一覧	
【事務局から】	18
学部支援基金・特別維持会費報告 お悔み申しあげます 会員寄贈図書一覧 編集後記	

表紙制作

和田 彩 AYA WADA
わだ・あや 書家／筆跡鑑定士／学術博士
兵庫県神戸市生まれ
六彩舎主宰
兵庫県書作家協会理事、飛雲会理事、神戸芸術文化会議員
神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程後期課程修了 博士号取得

主な個展
2017年 在ポーランド日本国大使館
2019年 ポーランド国立日本美術・技術博物館 Manggha Museum
2022年 フランス、スーラージュ美術館
2024年 パリ国際大学都市日本館

主な受賞歴
1995年 第47回毎日書道展 毎日賞（漢字部門）
2018年 神戸市文化奨励賞受賞
2020年 第10回紫陽会賞受賞
2021年 芸術文化団体「半どんの会」文化賞受賞



和田彩Web

— 翔ける 駆ける 架ける 世界へ —

まちなかアート「KOBE2024 世界パラ
陸上競技選手権大会」開催応援企画として
和田 彩が書いた書道パフォーマンス作品
4m×1m／墨／金和紙
未知の世界に向かって懸命に羽ばたいて
いくチャレンジ精神「翔」
誰より高く、誰より強い志をもって邁進
する「駆」
心と心をつなぐ芸術の力「架」
文字の力でみんなの夢を応援します

和田 彩



今後の紫陽会～国際人間科学部への支援～

神戸大学国際人間科学部同窓会「紫陽会」
会長 蔭山 慎吾

11月30日に神戸大学百年記念館で開催された第6回シンポジウムに参加しました。冒頭、藤澤正人学長から神戸大学が目指すビジョンが示されました。キーワードは「グローバル・イノベーション・キャンパス」です。世界をリードする新たな価値を創造し、「知」「人」「環境」を創出するグローバル拠点としての大学を目指し、次代を担う優秀な人材を育成するというものです。

この神大ビジョンに沿って、国際人間科学部は、「グローバル共生社会」の実現に貢献する「協働型グローバル人材」を育成することを目的としています。その根底には、「人から学び、人を生かす」という教育学部創設以来の理念が脈々と受け継がれています。

現代社会は、多様な情報が錯綜する変化の激しい社会となっていますが、その一方で、われわれは、地球規模での様々な課題に直面しています。世界に目を向けると、ロシアによるウクライナ侵攻や、中東ガザ地区をめぐる紛争など、今なお多くの人々の命が危機にさらされています。また、地球温暖化をはじめとする環境問題も見逃すことはできません。国内では能登半島地震からの復興や福島第一原発の廃炉問題、少子高齢化の進行や生活格差の拡大など課題は山積しています。

私は、これらの課題解決の手がかりは、相互理解のためのコミュニケーション能力と協働性の向上ではないかと考えています。国際人間科学部が育成を目指す「協働型グローバル人材」とは、まさにコミュニケーション能力と協働性を兼ね備え、課題の解決に貢献できる能力と意欲を身につけた人材ということです。

紫陽会の大きな使命の一つは、国際人間科学部とそこで学ぶ現役学生への支援です。4月4日の入学式では、全学部約4400名の入学生を代表して国際人間科学部の女子学生が感謝と決意の気持ちあふれる宣誓をしてくれました。今後の飛躍と成長を確信させる立派な宣誓でした。紫陽会はそのような学生を支援したいと考えています。紫陽会はこれまでも、2004年に学部支援基金を創設、2011年に紫陽会賞を創設、2013年にはグローバル人材育成基金を創設など、様々な支援に取り組んできましたが、今後も可能な限り取り組んでいきたいと考えています。

さて、紫陽会がこのような使命を果たすためには、解決すべき多くの課題があります。

その第一は、ご心配をおかけしている会計問題の解決です。紫陽会は、使途不明金の賠償を求めて当時の会計担当者に対する民事訴訟を提起してしま

したが、11月13日、神戸地方裁判所において、被告に約2339万円の支払いを命じる判決が言い渡されました。これに対し、被告は大阪高等裁判所に控訴しており、解決までにはなお一定の時間を要する見込みです。紫陽会としては、今後も問題の解決に粘り強く取り組んでいく所存です。

第二は、組織の活性化です。現在の会員数は約2万人で、教育学部・発達科学部の卒業生が約12000名、国際文化学部・国際人間科学部の卒業生は約8000名です。その反面、国際文化学部・国際人間科学部の卒業生が評議員全体に占める割合は1割にも達していません。組織の活性化のためにはぜひとも若い世代の人材登用が必要です。また、国際文化学部・国際人間科学部の卒業生は官民を問わず多方面で活躍しておられますが、教員はごくわずかです。したがって、これまでの教育学部中心の同窓会から、現役学生も含めた若い世代が参加できる同窓会へと転換を図る必要があります。例えば、現在ホームカミング日の学部企画は、鶴甲第一キャンパスと第二キャンパスとに分かれて開催されていますが、将来的には合同で開催できるようになればと考えています。

第三は、大学との連携です。情報交換だけにとどまらず、会員が学部の講義を参観したり現役学生と交流したりするような機会を持つことができれば、一層連携が深まるのではないのでしょうか。また、現在の紫陽会の支援は資金面での支援が中心ですが、教育実習の事前実習以外にも、多方面で活躍する卒業生の知識と経験を生かした支援ができるのではないのでしょうか。

最後は、ホームページの充実です。ホームページのタイムリーな更新は長年の課題です。現在はホームページの管理を業者に委託し、掲載内容を業者に送信して業者が更新するという方法で行っていますが、大学の最新情報は比較的容易に入手できますが、会員の活躍の様子などの投稿は募っていません。可能であれば紫陽会の手で随時更新し、積極的に情報を発信することが理想です。

最後になりましたが、おそらく会誌第5号が皆様のお手元に届くのは、年も明けた令和7年1月になると思います。令和7年が皆様にとって幸多き年となりますようお祈り申し上げます。

あわせて今後とも紫陽会の活動にこれまで以上のご理解とご支援をいただきますようよろしくお願い申し上げます。

(令和6年12月9日)



国際人間科学部の現在

神戸大学国際人間科学部長 梅屋 潔

藤濤学部長の後任として学部長に就任いたしました、梅屋潔と申します。文化人類学、アフリカ地域研究を専門としています。延べで4年間ほど、アフリカで生活経験があり、ときにちょっとしたことで日本社会では当たり前筋道を違えることがないわけではありませんが、どうぞよろしくお願いたします。

国際人間科学部が誕生して以来、その母体となった国際文化科学研究科と人間発達環境学研究科の研究科長が2年ごとに学部長・副学部長を兼ねています。藤濤研究科長が1年間学部長を務めたのちに退任し、神戸大学の副学長に就任しましたので、後任の私が残任期間の1年間、学部長を務めることになった次第です。したがって、次の学部長は、人間発達環境学研究科の次期研究科長が2年間、務める、という予定になっています。

猛威を振った新型コロナウイルス感染症も通常のインフルエンザと同じ扱いになりました。わが学部の留学生の送り出し、受入状況もようやく落ち着きを取り戻してきました。すでに本学部の必修科目であり最大の特徴であるGSP（グローバル・スタディーズ・プログラム）では、実践型で109名、研修型（海外）で67名、留学型（中期）で17名が、留学しています。また、GSP留学型（中期）は、前期17名、後期40名、GSP留学型（長期）秋派遣43名が予定されております。

ほぼ、新型コロナウイルス感染症が蔓延する以前の状況に戻ったと考えていいでしょう。ところでこの実践型と研修型には、25名のオンライン受講が含まれています。いわゆるコロナ禍を経て、われわれが学んだこともたくさんあります。実際に足を運んでそこに生活する留学のよさや学習効果のすばらしさなどは、ますます再認識されたことの一つですが、逆に、オンラインのできることの幅も広がりました。やり方によっては、居ながらにして留学の「ある側面」は学ぶことができる、そんなこともわかってきたのです。もちろんそれに頼り切りになることの弊

害とのバランスは常に意識しなければなりません。

農学部を中心に展開している「大学の世界展開力」事業に関しても、オンラインの講義を私どもの学部でも昨年度に引き続き提供いただける見込みです。まずはオンラインで入口を開拓し、情報を蓄積してから無理なく実際の留学に進む、というような流れも現実味を帯びてきています。

こうした時代の変化にも対応して、新しい価値観やICT技術の習得・活用などコロナ後に求められる新しい「世界像」とより充実した大学での学びを実現するため、「学修」「体制」「プログラム」の強化に取り組んでいます。仮想空間利用やCOIL型プログラム等、ICTsを活用した国内実施プログラムの充実に加え本学の他の国際交流事業GCP（グローバル・チャレンジ・プログラム等）との連携、バーチャルGSPオフィスの活用による学生サポートなどによりGSPの更なる強化をはかろうとしています。

また、現在、令和7年度入学生から実施するカリキュラム改定に取り組んでいます。カリキュラムの体系性、スリム化、充実化と効率性を柱とする方針で進めています。

また、中学、高校の保健体育の教職課程は、令和6年度をもって廃止となりました。

このような細かな、しかも重要なアップデートを最近でもいくつもしてはいますが、骨格は変わりません。教育学部が母体の一つですから本学のどの学部よりも教育を大切にしなければなりません。また、国際という名前を冠する学部ですから、学生たちには、今後ますます海外に飛び立ってみたいと考えております。大学全体としてもグローバル教育に力を入れているところで、いくつかのサポートも現実化してきていますが、紫陽会にしかお願いできない、様々な事案も俎上に上ってきています。紫陽会には、本学部のますますの発展を見守っていただき、これまで以上にますますのご支援と、ご指導ご鞭撻をお願いしたいと考えています。

研究紹介



ジェンダー研究と 移民研究の会うところ

神戸大学国際人間科学部グローバル文化学科長 青山 薫

ときに長距離におよぶ移動をくりかえしてきた人類は、「ホモ・モビリタス」とも呼ばれています。しかし、現代社会に生きる私たちの移住や移動に関する常識は偏狭です。たとえば、今から1000年ほど前に交易を担い、移動と戦闘を旨としていたバイキングについてです。2017年に、ある有力なバイキング戦士の墓にあった遺骨が女性のものであったことが判明し、物議をかもしました。『ナショナルジオグラフィック』誌の報道では、この「発見」をした研究者自身さえその驚きを語っています。

少し戻って1980年代後半には、「移民の女性化」が注目されるようになっていました。国境を越える移民の半数が女性であることが「発見」され、それまで男性労働者を前提としてきた移民研究を刷新することになったのです。さて、ここで繰り返し「発見」を使ったのはもちろん皮肉です。明らかになったのは、学術の世界も私たちの常識に強く縛られてきたこと、おそらくは歴史を通じて、女性も男性と同じように移動してきたことに、学術の世界が目をつぶってきたことだったからです。

バイキング戦士や移民は男性に違いない、と私たちに思い込ませる——いや、そんなことを意識させなくする常識を支えているのが、「ジェンダーバイアス」です。1980年代以来これがあぶり出されてきたのは、フェミニズム運動と理論の広がりによるところも大きいのですが、おかげで科学の中にもあるバイアスが明らかになり、これを覆すことで新しい科学が拓かれました。

しかし、学術をめぐる開拓は一度何かを発見したら終わり、というものではありません。ジェンダーに関する研究も、私たちのジェンダーバイアスを明らかにするに留まるものではありません。このバイアスがどう生み出され、利用されてきたのか、意識す

ることもないくらい「自然」に思われるのはなぜか、政治や経済、国家や社会との関係はどのようなものか、文化や時代によってどう変わるのか、格差と差別をどう生み出すのか、などを解明してきたのです。

ジェンダーと移民の組み合わせに戻ると、移民の中の女性が増えるという数的な側面だけでなく、「移民の女性化」の質的な側面も解き明かしてきたのが、ジェンダー研究です。つまり、「女性の仕事」と言われてきたケアワーク、しかもいわゆる「女性的な」、柔軟でマルチタスクをこなす働き方が要請される現場で、ますます移民が求められるようになっている、そのようなグローバル社会における「女性の仕事」の拡大を、「移民の女性化」と呼んだのです。

以上のような学術研究の歴史に導かれて、私も仕事をしてきました。実証研究上の中心的なテーマは、性サービスを提供する仕事に関わって国境を越える人々の経験について。そして、この仕事をケアワーク（人の世話をする労働）の中に位置づけることです。現在、フランス、イギリス、日本、ルーマニア、フィリピン、タイなどで共同研究・調査を進めています。抽象的には、ジェンダーとセクシュアリティ（性行動・性意識等の総称）、グローバルな南北格差をふくむ階級、人種・民族・国籍・市民権の関係と、その網目の中で、特に不利な立場におかれた人々が生き延び、かつ、いかに尊厳と安全をもって生きられることに関心があります。

さて、「ケアワークの中」に移民による性サービスの提供（セックスワーク）をふくめたことを疑問に思った方も少なくないでしょう。この疑問に答えることも、私の研究者としてのライフワークです。学部の「ジェンダー社会文化論」の講義でもほんの少し触れていますので、よろしければ聴講にいらしてください。



グローバル文化学科

英国留学記

4回生 三島尚也

部局間交換留学及びGSPとして、英国・マンチェスター大学に9か月間留学をする機会を頂きました。派遣期間中、「英国における日本食の存在」をテーマに、飲食業界の状況や日系企業の展開等について、市内の飲食店・スーパーの嗜好や傾向を見て回り、文化・経済的調査を試みました。あいにくの円安で口にする機会は限られたものの、日本国内では知ることの出来なかった雰囲気や賑わい、現地の実情を多くの店舗で把握できた点にフィールドワークの意義を感じます。SushiやRamenの人気は言うまでもありませんが、その提供方法や調味の差異が特に興味深く、曲解された日本文化も含め多くの気づきを得ました。また、食事付き学生寮に滞在していたため、旅行での表層的体験とは異なるリアルな英国料理を味わうことができ、現地でしかできない体験を通して両文化の比較を行ったGSPでした。

「食」に限らず、異文化での生活は多くの気づきを与えてくれ、自身の価値観にも変化がありました。現地の学生と同じ授業を受講し、自身の取り組みが通用することを知った点は大きな自信となりましたが、英語はできて当たり前であり、「そこから何が出来るのか」が前提として問われていることを感じました。複数言語の学習や専門性の習得に励む友人との関わりを通じて「当たり前」のアップデートができた点に、今後の自身の向上の余地を感じました。一方で、寮生活での密接な人間関係の下、「結局は同じ人間である」という認識も強まりました。多くが同じ悩みや感情を抱いて生きており、根本は大きく変わらないという普遍性から、だからこそ各々の価値観・文化を理解し尊重する必要があるという教訓を得た意義深い留学となりました。



珍しく良い天気 of 学生寮

発達コミュニティ学科

多様な出会いの中で

3回生 岩原大悟

・芸術祭を通して見る長田

私はGSPの国内研修、海外研修を通して、多くの貴重な経験をすることができました。国内研修では、「アートによる都市再生と多文化共生プログラム（神戸）」に参加し、神戸市長田区で行われた下町芸術祭にスタッフとして関わりました。私にとって、長田区はそれまで縁がない土地でしたが、この活動を通して、長田という地域のコミュニティの強さを感じました。長田区内の空き家、店舗、商店街を活用して、展示されるアート作品は、見る人にとって新鮮さと驚きを感じさせるものでした。また、様々な国や地域をルーツに持つ人々との交流もたくさんあり、まさしく、「多様性」あふれる街でした。スタッフとして関わったことで、アーティストの方々、地域の方々双方とつながりを感じることができ、長田が大好きになって1ヶ月の活動を終わりました。

・出会いの連続だった台湾留学

海外研修では、「国立台湾大学：中国語と台湾文化」に参加しました。ここでは、毎日が出会いの連続でした。同じく留学生として一緒に授業やプレゼンテーションに取り組んだ仲間、学生チューター、ボランティア団体の方々といった人との出会い、そして初めての景色や食べ物など生活を通して得た出会いがあり、とても1ヶ月とは思えないほど濃密な経験をすることができました。最初はクラスに馴染めるか不安でしたが、毎日の授業、放課後の食事を通して、全員と仲良くなることができました。また、自分が所属しているボランティア団体の台湾支部の方とも交流し、コロナ以降途絶えていた日台交流再開のきっかけを生むことができました。帰って来て半年が経った今でも、まだ寂しさが残っているくらい充実した海外研修になりました。



国立台湾大学図書館

第18回ホームカミングデイ 2024（令和6）年10月26日（土）

■ 全学式典（於：出光佐三記念六甲大講堂）

今年度もより多数の参加を目指して様々な開催工夫を凝らして当日を迎えることができました。開催にあたってのHCD運営委員会の多方面の配慮、下支えにあらためて感謝いたします。

さて全学式典は、「紫陽会」準会員の秋田さんら神戸大学放送委員会の学生方々の進行で進められ、オープニングでは応援団吹奏楽部の勇壮な演奏が講堂に響きました。

学長、校友会会長挨拶に引き続き、作家の福田和代氏が「人生に無駄なことはない」という題で講演をされました。福田氏は本学工学部を1990年卒業され、金融機関に入社。システムエンジニアとして専門職に就きながら高校時代からの夢であった『SF作家になりたい』という思いを具現化されたまさに“二刀流の先駆け”というべき経歴の持ち主です。自身がなりたいと考えているものへの具現化の様々な手法や日常の思考方法などを明快な口調で語られました。

ビジネスチャンスを探るのも、広げていくのも共通するのは“自分の感性を研ぎ澄ませて日々を過ごす”ことが肝要で、結果として『人生に無駄なことはない』という人生訓を得て創作活動に邁進しておられるとのことでした。今後も実社会でご活躍の同窓諸氏の叡智に富んだ内容のご講演を拝聴したいと感じた時間でした。

その後、医学部生の能登半島被災地支援ボランティア報告、混声合唱団アポロンのコーラスが披露され、最後は恒例の応援団と同吹奏楽部による演舞パフォーマンスで全体式典は盛会のうちに幕を閉じました。



歌声響く

■ 学部企画 鶴甲第1キャンパス報告（国際文化学部・国際文化学研究科 卒業・修了生）

国際文化学研究科学生委員長 中村 寛

今年度の講演の部は、太田光海さん（国際文化学部2012年9月卒業）による講演『「文化」と『帝国』に向き合い続けて－国際人間科学部が生み出しうる鋭利な一例』と質疑が行われました。ここでは、卒業・修了生、在校生、教員らの全てが、現在のポストコロニアリズム、資本主義、差別、虐殺などが継続する国際社会の中で研究を続けていく本部局と各人の課題が共有され、意見を交換する貴重な機会となりました。その後の卒業・修了生のビデオレターの上映は、当部局の研究・教育成果の最たるものであり、卒業・修了生の国際的な活躍や声を動画で視聴することにより、誇りと温かい気持ちを喚起することとなりました。また、在校生2名の報告は、現在も当部局が、コロナ禍などにも関わらず、以前と同様に、意欲的な新世代の育成の場となっていることを示すことができました。講演については、昨年が続いてオンラインの視聴の機会を設けたところ、卒業・修了生と在校生を合わせて8名の参加者が得られ、昨年よりも大幅に増える成果でした。

懇親会は、卒業・修了生、在校生、教員、名誉教授の出席者が総勢50名となるかつてない盛会となりました。卒業・修了生と名誉教授の近況報告を頂き、共有することで、部局の意義や今後のあり方を振り返り、各参加者の今後のキャリア、研究、国際社会への関与、人生設計を考えるための良い機会となりました。また、共通の関心や今後のビジネスのために有益なネットワーク形成の機会ともなりました。



鶴甲第1会場全員集合

■ 学部企画 鶴甲第2キャンパス報告（教育学部・発達科学部 卒業・修了生）

恒例のキャンパスツアーの後、紫陽会賞授賞式に引き続き今年度受賞者の藤室玲治氏から『「ボランティア元年」から30年を振り返る～管理と自治の間で～』と題して講演をしていただきました。藤室氏は、阪神・淡路大震災以降の自らの活動をもとにボランティアは行政の管理とは別に自治を獲得する必要性があると訴え

られました。概要は以下のとおりです。

「ボランティア元年」と言われた1995年の阪神・淡路大震災が、実はボランティアの頂点であり、その後、行政によるボランティアの制度化、学生のボランティアに対する大学の管理・干渉が進み、学生ボランティアは減少していること、管理に従わないボランティアは「野良ボランティア」と非難される現状が報告されました。阪神・淡路大震災当時は、ボランティアは全て「野良ボランティア」であり、皆で議論して決める「自治の学校」であったこと、ボランティアは「言わなくてもする、言われてもしない」（草地賢一）独自の存在として、ボランティアの自治を獲得していく必要性が訴えられました。

次いで、ボランティアの制度化が進む一方で、災害現場では行政によるボランティアの調整機能は働かないことが指摘されました。能登では、県の調整が機能しない中で、基礎自治体とJVOAD（全国災害ボランティア支援団体ネットワーク）との連携が成功した事例が報告され、今後の行政とボランティアとの関係のあり方が示されました。

記念講演に続いては同窓会員と・現任教員・現役生との交流会と、伊藤真之先生より「『高校生等を対象とした科学技術人材育成プログラムROOTと神戸大学における早期人材発掘・育成の取組への展開』」と題して、神戸大学の高大接続事業の紹介がありました。終了後、退職された先生方も交えて懇親会が催され旧交を温めました。



世代を越えて

紫陽会賞

紫陽会賞

学術研究、スポーツ・芸術などの文化活動、社会貢献活動など様々な分野で顕著な活躍をされた会員、準会員の功績を讃えるために設けられた「紫陽会賞」も今年度で第14回を迎えました。今年度の「正会員の部」受賞者の藤室玲治様は国際文化学部卒業生としては初めての受賞となり、2017年度より国際人間科学部同窓会として活動をしている新生「紫陽会」にとって意義あることだと思います。藤室様には学部企画（鶴甲第2会場）で記念講演もしていただきました。概要は学部企画報告に載せていますのでご覧ください。



紫陽会賞メモリアル

2024年度 第14回紫陽会賞受賞者紹介

正会員の部 藤室 玲治 氏（2008年総合人間科学研究科博士課程修了）

国際人間科学部在学中に阪神・淡路大震災に遭遇。母校の兵庫高校避難所で災害ボランティアに従事し、その後も様々なボランティア活動に取り組む。神戸大学大学院修了後も神戸大学や東北大学等で学生ボランティア支援の業務にあたり、東日本大震災時にも被災地の支援に継続的に取り組まれました。2022年より福島大学地域未来デザインセンター特任准教授（復興創生担当）の職にあり、現在は、福島県の浜通りの復興支援活動や、2024年能登半島地震被災地の支援活動に取り組まれています。

準会員の部 岡本 果林 氏（国際人間科学部、発達コミュニティ学科3回生）

2022年度には全日本ジュニア障害馬術大会ヤングライダー障害飛越選手権で優勝するなど馬術部の中心選手として活躍され、2023年度は国民体育大会（かごしま国体）の馬術競技、成年女子二段階飛越において、国体初出場ながら愛馬「ジゴロ」とともに人馬一体の華麗な飛越を披露し優勝されました。



紫陽会賞受賞者近影

教育実習事前実習

教員を目指す後輩のために

今年度も4月に教員を目指す学生のために紫陽会の会員が教育実習事前実習8講座の講師を務めました。昨今「学校現場はブラック」というマイナスイメージが広がり、教員を目指す人材も年々減少しています。その中、教育実習を目前に控えた学生たちに、教員という職に意欲と期待をもってもらうために、以下の8名の講師が子供や保護者理解、保育や授業作りなどについて豊かな経験をもとに語り、教員のやりがいや楽しさを伝えました。

受講した学生からは、「実習に向けての不安が小さくなった」「子どもたちとの出会いが楽しみだ」など好評でした。

【2024年度講座 4.12～4.26】（ ）内は対象課程 受講生数 幼11名・小39名

・人権・同和教育（幼・小）	岡田 治美 氏	・特別活動と学級経営（小）	松田 忠喜 氏
・道徳の授業（小）	清岡 延吉 氏	・家庭との連携（幼・小）	板東 克則 氏
・こどもと生活指導（小）	栗木 剛 氏	・基本的生活習慣の形成（幼）	林 理恵 氏
・環境構成とクラスづくり（幼）	石川 晴実 氏	・個の集団の育ちと保育（幼）	岩濱里江子 氏

講師の先生方、後輩たちのために忙しい中を本当にありがとうございました。

受講生の感想から

- ・基本的生活習慣について深く考えたことがなく、当たり前ものとして軽視してしまっていた。しかし将来にわたって他者との関係を作っていくうえでも大きな要因となることを知り、子供と関わる時には、少しのことでも大きな意味を持っているのだと改めて気づかされた。これからの実習でも細かい部分まで着目し、実りの多い期間にしたい。
- ・教師の立場ではどうしてもいろんな意味で目立つ子供に目がいきがちになってしまうと思うので、意図的に目立たない子を注視し、認める場面を作りたい。「先生はあなたのことを見ているよ」と子供に伝わるような具体的で温かなほめ方ができるようになりたい。
- ・附属校であっても、それぞれ違う家庭的背景を持ち、人柄や考え方も違う。そのことを意識し、多様な子どもたちと関わる時間を実習中に大切にしたい。
- ・大人の考えを当たり前として捉えるのではなく、子供の考えが正しいこともあるということを頭に置きながら実習を行うべきだということを知った。今の子どもたちは私たちの小学生のころと比べると環境や考え方が変化しているに違いない。実習中には指導教員の方のアドバイスはもちろんのこと、子どもたちからも学ぶ姿勢を持ちたい。
- ・理想の教師が必ずしも優れた人間ではないという言葉が響いた。「弱いものを見捨てない」ことがなによりも大切であると気づくことができた。今まで、教師とはただ子供に学習させるだけの仕事だと思っていたが、根っここのところから「ひと」して深くかかわる仕事だと気づくことができた。



大阪支部

2023年度大阪支部総会を4年ぶりに開催しました！

津田 毅

大阪支部長・大阪市立東粉浜小学校長 1987（昭和62）年卒

2024年2月11日（日祝）午前11時より、道頓堀ホテルにおいて、3年間開催を見送っていた大阪支部総会を4年ぶりに開催いたしました。

当日は、神戸大学国際人間科学部長 藤濤文字先生、神戸大学国際人間科学部同窓会「紫陽会」会長 蔭山慎吾先生をご来賓としてお招きし、参加者総数20名で開催する運びとなりました。コロナ禍で会合することができなかった期間が長かったこともあり、久しぶりに再会できたことで、参加者はみな喜びでいっぱいでした。

総会では、まず始めにご来賓の藤濤文字先生より「国際人間科学部の現状、そしてこれからの展望について」お話しいただきました。参加者のほとんどが教育学部卒業生ですので、現在のこの学部について詳しく教えていただけたことにとってもありがたく存じております。

次に紫陽会会長の蔭山慎吾先生より「紫陽会の現状について」お話しいただきました。現在の紫陽会の課題と今後についてもお話しいただけことは、同窓会員として皆しっかりと受け止めていました。

続いて議事の確認をした後、ミニ研修会として「強みを生かした学校経営」という演題で、支部長である私が今までの学校経営の実践報告をさせていただきました。教員時代、教頭時代の様々な経験を経て、その経験を財産とし、校長となってから3校での学校経営をどのように組み上げていったのかを語らせていただきました。最近のICT化が進む教育現場の

実態についてもお伝えすることができました。ここ数年でデジタル化が進み、以前の学校とずいぶん様子が変わっていることに驚かれていましたが、学校経営の考え方については多くの方に共感していただけたようです。

その後、参加者全員で記念撮影をし、引き続き、楽しみにしていた懇親会を行いました。

飲食、歓談が進む中、近況報告を全員がするとともに、欠席者からの手紙も紹介することで、懐かしい話には皆素敵な笑顔となっていました。

最後に、来年度も同じ2月11日（祝）に行う予定であることを確認し、全員元気で再開を誓い閉会しました。

ただ、その2週間後2月25日、大阪支部の顧問として長年先頭に立ちご尽力いただき、本総会、懇親会にもお元気に参加されていた田中洋慈（昭和35年次）様がお亡くなりになりました。

ここに心から哀悼の意を表するとともに、謹んでお悔やみ申し上げます。



参加者全員で、来賓の方とともに記念撮影

姫路支部

令和5年度の紫陽会姫路支部総会・懇親会を開催しました

稲葉 一子

姫路支部副支部長・姫路市立糸引小学校長 1987（昭和62）年卒

令和6年2月4日（日）11時より、姫路総社会館（姫路市総社本町191）において、令和5年度の姫路支部総会・懇親会を開催いたしました。

蔭山慎吾紫陽会会長、進藤正洋白鷺教育会会長に

ご臨席いただき、参加者総数21名という少人数ではありましたが、会を開くことができました。総会では、米田支部長からの挨拶と事業報告に続き、会計報告、新役員が発表され了承されました。例年は

議事終了後、講師をお招きして講演会を行い研修を深めてまいりましたが、今年度は研修会を行わず、久方ぶりに会員相互の親交を深める懇親会を中心に時間を使うことといたしました。

懇親会では、参加者一人一人がマイクを持って順に、自己紹介を兼ね、自身の健康法の紹介や大学時代の思い出などについて語っていただきました。昔取った杵柄とでも言いましょうか、時間が経つのを感じさせない巧みな話術に加え、幅広い年齢層の方々から伺う興味深いお話に、感嘆の声はもちろん、時折笑いも起きる等、賑やかなひと時となりました。思えば、過去4年間はコロナ禍のためこのような懇親会を持つことができませんでした。その間も研修会の開催等さまざまな工夫を凝らし、姫路支部の同窓生として絆を深めてまいりましたが、このような会員相互がフランクに話ができる会の必要性

も改めて感じた次第でした。

また、当日欠席されましたが約70名の方々からハガキにて近況報告いただき、多くの方々が多面で益々お元気に活躍されていることも知ることができました。

来年度の再会を誓い、令和5年度の姫路支部総会・懇親会を閉会しました。



蔭山紫陽会会長挨拶

東京支部

支部会員紹介～多様な分野で活躍する仲間がいます～

菅河 真紀子

東京支部長 1985 (昭和60) 年卒

「日本人の『大量採用、大量離職』の傾向が顧客満足度の低下を招き、日本の生命保険業界全体の地位を下げています。業界の変革を目指し日本における生命保険募集人の地位向上を人生の目標としてがんばります。」と語るエネルギー溢れる元サッカー少年。

おうちに帰ると一転して、優しい子煩悩な3児のパパさんに早変わり。1番下のお子さんは今年5歳になられるとか。実家に帰ったときは、姫路市の観光大使として姫路城の案内ボランティアなどもされているそうです。お仕事と子育てとボランティアの両立は大変でしょうがこれからも日本の代表として益々のご活躍を期待しています！ (文責：菅河)

「Million Dollar Round Table」

保城 章人 1999年 発達科学部卒

東京支部では活動報告と合わせて、東京支部で活躍されている方のご紹介をしております。今回は、紫陽会東京支部の若手ホープ、保城章人さんをご紹介いたします。

保城さんは、名門兵庫県立姫路西高等学校のご出身で、1999年神戸大学発達科学部をご卒業後、あさひ銀行(りそな銀行)に入行されました。その後、2006年に外資系生命保険会社プリデンシャル生命保険にヘッドハンティングされ、現在も世界を股にかけてご活躍中です。

皆さんは、「MDRT」という組織をご存じですか。MDRTというのは、Million Dollar Round Tableの略で1927年に発足した卓越した生命保険・金融プロフェッショナルの組織です。70か国の500社の専門家が所属するこのグローバル組織の中で、保城さんは、日本の全保険会社の中からたった5人しか選ばれないという米国本部委員を長年務められています。



Million Dollar Round Tableの仲間たちと(右から3人目が保城さん)

ICT教育が導く未来

神戸市立なぎさ小学校校長 **氣賀 諭 志**
 教育学部初等教育科 1990（平成2）年卒

コロナ禍と時を同じくして全国に全ての児童生徒用端末が配備され、数年が経とうとしています。導入当初はオンラインでの児童生徒の学力保障のための道具という色彩が強く、現場の教員もやむにやまらず使っているというような空気が流れていました。

しかし本当は、単なるオンラインやデジタルドリルのための学力保障ツールではなく、子供たちが未来を生き抜いていくために必要な力「情報活用能力」をつけていくために整備されたものでした。考えてみると我々が学生の頃は、新聞や週刊誌、テレビなどのメディアから情報を得て、自分たちの生活に反映させるという生き方をしていました。そんな社会の変化は教育にも徐々に表れ、私が教員になって初めての学習指導要領の改訂で5年生の産業の学習に「情報や通信にかかわる仕事」という内容が登場してきた当時には違和感を覚えたものでした。でもその視点は確かなものでした。その後のインターネットの普及、スマートフォンの登場、業務のオンライン化など多くの生活環境にICTが取り入れられたことは周知の通りです。そして、今やSNSの普及で全ての市民が情報の受け手だけでなく送り手になりうるという環境が生まれ、誰もが世界中に自分の体験や思いを発信できる状況になっています。

その社会変化に対して学校現場はどのように対応できたのでしょうか。GIGAスクール構想より一足早く導入された小学校における「プログラミング教育」の導入。実際の学校現場からは、なかなか進んでいないという印象を私は持っていました。

そしてコロナ対策が一段落した2023年度、改めてGIGAスクール構想の進捗状況がクローズアップされ、神戸市全体でも端末活用の促進の号令がかけられました。

そのような中、私が勤務する神戸市立なぎさ小学校では2024年度の「近畿放送教育研究大会・近畿学校視聴覚教育研究大会兵庫大会」の会場校になることが決まり、2年間にかけての研究がスタートしました。それより以前にも校内研究でGIGA端末の活用はテーマとされていましたが、この年から大学の先生を招くなどし、もっと広く未来に向けての情報活用能力をとらえてほしいという厚みを持たせていきました。こうした現在の研究活動においてネックになるのが「働き方改革」です。いろいろな研修が増えていくのは大きな負担でもあります。ただ、

本校の教員は前向きに取り組み、それが子供たちの成長につながっていきました。一校長の思いでできることは少なく、本当に先生方に感謝です。

2024年度、研究大会の年が始まりました。いろいろな方々のお力添えで神戸市教育委員会の「情報教育推進校」の指定を受けて指導主事が関わる、また教育実践研修（従来の神小研活動）では教科の垣根を超えたバックアップを受け、かつてない研究体制が整えられました。

研究を進めるうちにあることに気づいていきます。それは、ICTは授業の中心ではなく、むしろ授業の中に溶け込む素材であるということです。ICTがなくても授業はできます。ただしICTを活用することで、子供たちはより多くのことを学んでいきます。学習支援アプリを通じて、瞬時に全ての友達の考えを知ることができる。また一方では今まで受動的に学習していた児童も端末に自分の考えを打ち込み、能動的に変化していく。そして多くの情報を得た学びをさらに整理して自分の考えをブラッシュアップしていく、そんな学びが自然と生まれていくのです。ただそれがあるだけで、実は授業のねらいは変わっていません。でも、子供たちの力は着実に伸びていくのです。

我々は今、毎日スマホで情報を得ています。今の子供たちはほとんど送り手になるべきで、その土台を小学校教育で培う、それが可能な時代になってきています。



～～神戸大学☆夢ラボ～～

榛原 久仁子（旧姓 中村）
 教育学部初等教育科 1982（昭和57）年卒

毎週日曜朝 8:45～（15分間）、ラジオ関西（AM558/FM91.1）の番組『神戸大学☆夢ラボ』が放送されているのをご存知でしょうか？

神戸大学とラジオ関西が産学連携して「SDGsと地域連携」を大きなテーマに掲げ、神戸大学が持つ[知]を広く情報発信しています。

吉田松陰先生のお言葉『夢無き所 成功なし』から、藤澤正人学長がネーミングされて、「多様な人との出会い→多様な価値観」をコンセプトに、各専門分野の研究者がリレー方式で（素人にも）分かりやす

く面白いお話をしてくださっています。

2023年4月にスタートしており、進行役は毎回、神戸大学出身のラジオ関西パーソナリティ 天宮 遙さんが務めていらっしゃる。

実は、前号の「紫陽会」誌にて紫陽会会計の由々しき事態を知り、母校の同窓会を信頼して（15年前に）寄付した20万円について「何に使われたのだろう？」と騙された気分であった時、旧友（経済学部出身）が教えてくれたのが、この『神戸大学☆夢ラボ』です。

学生時代の私は、教育学部のサークル内で「はて？」と違和感を持つことが多く、努めて他学部生と積極的に（健全に）付き合っていました。（せっかく総合大学Universityに入学したのだから…）互いの愛読書を貸し借りした後、感想や意見を述べ合う中で、彼らから得た多様な価値観やアイデアが、卒業以来ずっと国内外の公立学校で（今も）教員を続けさせていただいている原動力になっている気がします。

『神戸大学☆夢ラボ』は、そういう学生時代の「異なる視点で学ぶ喜び」を思い出させてくれるのです。

未だの方は是非一聴をお勧めいたします。

ラジオが無くてはradikoから、また過去の放送は下記URLから聴くことができます。

「人生100年時代」を幸せに生きるヒントが見つかるかも知れませんよ！

<https://jocr.jp/programsite/yumelabo/>

対話を通じて学校を創る ～「チーム担任制」の取組～

神戸市立本山南中学校校長 柴垣 正治
教育学部中等社会科 1991（平成3）年卒

近年の教育をとりまく状況は大変厳しいものがあり、学校現場にもある種の閉塞感が漂っている。これは社会が変化する中で子供も保護者も教職員も多様な価値観を持つようになり、同時にそれぞれがその価値観や権利を主張するようになった現代、必然的なことなのかもしれない。社会に寛容の無さを感じる人が多いが、それは学校にはなおさら厳しい波となって押し寄せている。このような状況の中で、少しでも魅力ある学校を創造していくために、今までの



当たり前を見直しながら、新たな方策を考えていく必要に迫られている。

から、新たな方策を考えていく必要に迫られている。

昨年度より神戸市教育委員会のモデル指定校として、本山南中学校では「チーム担任制」を取り入れた学校経営に着手した。「あの子どもこの子ども南中の子」を合言葉に、ほぼ全員の教員がチームを組んでローテーションをしながら担任をしていくというものである。通常学級の全20クラスを基本的には2クラスを3人の教員がチームとなって担当する。合言葉には「全員が当事者意識を持とう」というメッセージが込められている。教職員に関する導入の最大のねらいは、大まかには以下ようになる。

まず、厳しい教員不足の状況の中でいかに教職員を少しでも効率的に組織して対応していくということである。育児や介護などで短時間勤務やフレックスタイムなど様々な勤務の教員も担任として活用することで、ある意味厳しい状況を凌いでいこうというものである。次に職員の意識改革に踏み込むということ。「先生のクラスで良かった」という教師冥利に尽きるような感情を子供たちが持ち、教師に信頼を寄せるという学級担任の長年の理想があったように思う。しかし、それは子供たちの主体性を培うことを犠牲にしていたことも少なからずあるのではないか。教師が子供を引っ張ることから、子供自身が考え行動できる姿勢を支援することにチーム担任制を活用してシフトしていくことへの意識改革である。また、働き方改革に実は最も必要な「働きがい」というものを、当事者意識を持つことで達成してほしいという思いもある。3つ目は、教員を孤立させないということ。真面目で責任感があるほど、自分だけで解決しようとして周囲への相談ができないということが起こりやすい。チーム担任制は、毎週のローテーションによって必然的にクラスはガラズ張りになり、うまくいっていないことがあってもほかの担任がすぐに気付ける。ローテーションの維持には対話や相談、連絡が不可欠で、教員の孤立を防げると感じる。

言うまでもなく、何も「チーム担任制」が今の山積する教育課題を解決する魔法の杖になり得るわけではない。導入からここまでの実践を通して感じていることに、改めて「対話の大切さ」がある。課題の改善に口をつぐまない。「あーだ、こーだ」を大切にする。そういうことを通じて、前向きな改善策だけでなく、他者を労わる優しさも生まれてくると実感する。今までの当たり前を見直し、「こう子供たちを育てたい」「こういう働き方がしたい」「こんなふうやりがいを感ぜたい」と夢を語るチーム本山南でありたい。

2024年度評議員会報告

2024年度評議員会が8月3日（土）神戸市教育会館で開催されました。

概要は以下の通りです。昨年発覚した本会の会計問題については現在法的対応が進行中で、その経過について本部から報告し、慎重に協議しました。その他の主な事業等は以下をご参照ください。

○議決権者数109名・出席者27名、委任状提出者52名

定足数は過半数55名で会は成立し、以下の議案について承認をいただきました。

- 協議等概要
 - ・ 昨年度判明した会計問題対応についての中間報告
 - ・ 2023年度事業報告、決算報告、監査報告
 - ・ 2024年度人事・組織案審議
 - ・ 2024年度事業計画案、予算案審議

2023年度事業報告及び2024年度事業計画

(大学関係行事・活動を含む)

2023年度

- 4月4日（火） 神戸大学入学式
- 4月6日（木） 新入生学部ガイダンス（「紫陽会」紹介）
- 4月7日（金） ～21日（金）
教育実習事前実習（8講座）講師派遣
- 4月22日（土） 役員会①
- 5月27日（土） 役員会② 会誌編集会議①
- 6月29日（金） 学部長懇談①
- 7月1日（土） 幹事会
- 7月27日（木） 神戸大学学長懇談
- 8月3日（木） 校友会役員懇談
- 8月5日（土） 評議員会
- 9月2日（土） 臨時幹事会
- 9月6日（水） 学部長懇談②
- 10月7日（土） 役員会③会誌編集会議②
- 10月28日（土） 第17回ホームカミングデイ
第13回「紫陽会賞」授賞式
- 12月9日（水） 役員会④・監事会（会計監査）

2024年

- 2月1日（土） 会誌「紫陽会」4号発行
- 2月4日（日） 姫路支部総会
- 2月11日（日） 大阪支部総会
- 3月2日（土） 役員会⑤
- 3月上旬 新入生向け「紫陽会」紹介動画作成アップ
- 3月26日（火） 神戸大学学位記授与式

2024年度

- 4月4日（木） 神戸大学入学式
- 4月5日（金） 新入生学部ガイダンス（「紫陽会」紹介）
- 4月12日（金） ～26日（金）
教育実習事前実習（8講座）講師派遣
- 4月27日（土） 役員会①・監事会①（会計監査）
- 5月25日（土） 役員会② 会誌編集委員会①
- 6月26日（水） 学部長懇談①
- 6月29日（土） 幹事会
- 8月3日（土） 評議員会
- 10月5日（土） 役員会③監事会②（会計監査）
- 10月26日（土） 第18回ホームカミングデイ
第14回紫陽会賞授与式
- 12月7日（土） 役員会④・学部支援基金委員会

2025年

- 1月中旬 学部長懇談②
- 1月末 会誌「紫陽会」5号発行
- 2月9日（日） 姫路支部総会
- 2月11日（火） 大阪支部総会
- 2月下旬 役員会⑤
- 3月下旬 神戸大学学位記授与式

コラム

2024年度「六甲祭」

今年も11月9日（土）10日（日）の二日にわたって「六甲祭」が開催されました。今年度は好天に恵まれ来場者も昨年比約2000人増とより盛り上がった会となりました。「紫陽会」も学生たちの六甲祭実行委員会の要請に応え、毎年援助金を提供し「六甲祭」を応援しています。



会員寄贈図書一覧

1996（平成8）年の「あなたの著書を大学図書館に寄贈」との呼びかけ以来、多くの会員からの編著書が寄せられています。

ここでは「会誌4号」以降にご寄贈いただいた図書5冊をご紹介します。これらの編著書は国際人間科学部鶴甲第2キャンパス（元発達科学部）にあり自由に閲覧できます。

書名	著者名	卒業・終了年次	出身母体	寄贈年月	コメント
あこがれ ～今だから言える 今だから書ける～	藤本 直子	S.54.3	教育	2023.12月	昭和・平成・令和と3代にわたり著者がふと心惹かれた事を、50ほどの短編をまとめたエッセー集
手紙 ～教育に何を伝え、何を遺すのか～	板東 克則	S.55.3	教育	2024.6月	幼稚園から大学まで多様な教育現場で筆者が積み重ねてきた実践をもとに語る、次世代に贈る教育論
塩尻公明 ～苦悩と随喜の生涯～	中谷 彪	S.41.3	教育	2024.9月	神戸大学教育学部創設に貢献した塩尻公明の評伝
ある遺書について (塩尻公明 著 復刻版)	中谷 彪 解説・編集	S.41.3	教育	2024.9月	1994年刊行の復刻版。編者による詳細な解説が付されている。
奨学生への指導手引 ～授業料無償化政策以降の指導助言～	湯田 拓史	H.16.3	総合人間科学 学研究科	2024.11月	奨学金制度や授業料無償化政策について、活用のための手立てを具体的に解説した学校関係者、福祉施設担当者を対象とした手引書

あじさいの小径（編集後記）

今号では大阪支部と姫路支部からコロナ禍でしばらく途絶えていた支部総会の報告が届き支部の活動が復活していることがわかり安堵しました。東京支部から紹介された保城氏の活躍、第14回紫陽会賞を受賞されたボランティア活動に熱心に取り組まれた藤室氏、国体馬術競技で優勝された岡本氏等、教育学部から発達科学部、国際文化学部、国際人間科学部と発展していく母校が多様な人材を輩出していることを今更ながらに感じる事ができました。

また今号から各学科の研究内容について寄稿を依頼したところトップバッターとしてグローバル文化学科長青山先生からジェンダー研究について原稿を

いただきました。「移民の女性化」のお話など聴講できるならもう少し詳しくお聞きしたいと思いました。グローバル文化学科三島さん、発達コミュニティ学科岩原さんからはGSPの貴重な体験をご報告いただき、学部への支援がお役に立っていることがわかりとてもうれしく思いました。

最後に第4号に続き今号も年内に発行できなかったこと、予算の関係で会誌全体をコンパクトにまとめざるを得なかったことお詫び申し上げます。今後も大学・学部の状況、会員諸氏の情報交換の一助となるよう紙面の充実を目指してまいります。

編集担当 副会長 笹 信隆

皆様の投稿をお待ちしています。

地区・支部・教科・回生コースの動向や会合について
随想・意見・論評・歴史地誌・趣味等々について

問い合わせ・宛先

〒650-0011 神戸市中央区下山手通6-2-19（甲陽会館内）

神戸大学同窓会紫陽会事務局（月・木 9:30～15:30）

電話・FAX 078-371-6322 Email kobe-ajisai@shiyohkai.com